

国語科学習指導案（3年2組）

1 単元名 「紀行文」を書こう（単元 旅への思い―芭蕉と『おくのほそ道』）

2 考察

(1) 教材観

①学習内容：学習指導要領上の位置付け

- ・時間の経過による言葉の変化や世代による言葉の違いについて理解すること。

＜伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項 イ(ア)＞

「言葉は、時間の経過により語形や語意などが変化していくという側面をもっている。ここでは、言葉のもつこのような性質に気付かせることで、自分たちが使っている言葉に対する興味・関心を喚起するとともに、理解や認識を深めるようにすることが大切である。」

- ・書いた文章を互いに読み合い、論理の展開の仕方や表現の仕方などについて評価して自分の表現に役立てるとともに、ものの見方や考え方を深めること。 <B 書くこと エ>
「学習活動としての評価は、生徒自身が表現を客観的にみる能力を育て、表現能力を一層伸ばすことに役立つ。また、自分の書いた文章に対する評価によって気付かされたり改めて認識したりしたことを意識し、自分の表現をよりよいものに高めたり、自分の見方や考え方を深めたりすることも重要である。」

②伸ばしたい資質・能力

- ・我が国の言語文化に関わり、自分の思いや考えを伝え合おうとする態度。
- ・文章を互いに読み合い、表現の仕方などについて評価して、自分の表現に役立てるとともに、ものの見方や考え方を深める力。
- ・目的や意図に応じて、自分の思いや考えを表現する力。

③そのために必要な指導・学習活動

- ・紀行文の最後に記す「俳句」について基礎的な知識を学び、俳句のきまりに気を付けて、ゴールデンウィークの出来事を俳句で表現する活動を行う。また、『おくのほそ道』の「冒頭」「平泉」「立石寺」の場面について、歴史的背景などに注意して作品を読み進め、作者や当時の状況等を知ること、作品の世界をより実感的にとらえられるようにした。さらに、表現の特色や作者の心情を考える際に、「自分ならどう書くだろうか」と思いを巡らせることで、自分の作品に活かせるようにする。
- ・推敲の場面で、自分の紀行文をリライトする学習において、紀行文の魅力がよりはっきりと分かるように書き換えるために、どこをどう書き換えたらいいかを話し合うことで、自分の表現に役立てることができるようにした。また、自分の作品をよりよく表現できるよう、気付かされたり改めて認識したりしたことについて振り返りを行うことで、ものの見方や考え方を深められるようにした。
- ・修学旅行中の一日の終わりに、その日の出来事と感想を「旅行のしおり」に書かせ、修学旅行（学校行事）を表現の場として設定する。また、修学旅行の体験をもとに「紀行文・現代文編」（文章＋俳句）を書く場面について、学習の始めに「立石寺」の場面を例に、気持ちを「じんわり」と伝えるという文学の特性について学ぶ。

④今後の学習への活用

- ・「近代の俳句」で、紀行文で俳句を詠んだ経験を活用して、情景に気持ちが表れていることや表現技法や切れ字などについて、作者の視点で作品を評価することができるため、さらに文学的な文章における読解力を高めることができるようにする。

(2) 生徒の実態（男子20名、女子20名 計40名）

①既習の学習内容や活動

- ・第1学年の「記録文」において、5W1Hを意識して書くことを学習してきた。
- ・『竹取物語』において、「かぐや姫は、月の都からこの国に来たことで、翁たちと親子の情愛を結び、求婚者の死に触れて「あはれ」と感じながらも、やがてこの国を去って、再び月へ

と帰っていく。」という「生者必滅・会者定離」の『竹取物語』の主題について考えてきた。

- ・『平家物語』において、「祇園精舎の鐘の声 諸行無常の響きあり 沙羅双樹の花の色 盛者必衰の理をあらわす」に描かれる「戦の勝敗には無関係に滅びは確実に訪れる」という「盛者必衰・諸行無常」の『平家物語』の主題について考えてきた。

②本単元に関わる生徒の実態

- ・我が国の言語文化について、自分の思いや考えを伝え合おうとすることに興味をもっている生徒は21名である。その主な理由として、「古典が好きで昔の人の考えや文学を読むのが好き。」、「『平家物語』で群読をグループで考えたのが面白かった。」などがあり、授業等の発表や話し合いの活動を通して、古典について互いの意見を伝え合おうとする態度が高まってきている。一方で、興味がないと答えた生徒は、「古典は昔のことで今とあまり関わりがない。」、「表現することが苦手である。」などの回答が見られた。我が国の言語文化について、自分たちが使っている言葉との関係性を見いだしながら学習に取り組めるように指導していく必要がある。
- ・文章を互いに読み合い、表現の仕方などについて評価して、自分の表現に役立てることについて、詩を創作する学習の授業後の感想から、「創作した詩を友達と交流する中で、自分の詩に生かせる効果的な表現や言葉選びについて学ぶことができた。」「詩を評価しながら読むことで読み手の視点が分かり、自分が書くときにも生かすことができた。」などの記述をした生徒が多かった。一方、ものの見方や考え方を深めることについては、共有の場面で、読み手の助言から、自分が書いた文章のよい点や改善点を理解することはできている。しかし、助言などを踏まえて書き手自身が課題を見いだすことを実現できているとは言えない。ものの見方や考え方を深めることについて、言葉がもつ曖昧性や表現による受け取り方の違いを認識し、その関係性を問い直しながら学習に取り組めるよう指導していく必要がある。
- ・目的や意図に応じて、自分の思いや考えを表現する力について、意見文や記録文を推敲する活動を通して、「主張と根拠の関係に気を付けるとよい」、「5W1Hを意識すると読み手に正確に伝わりやすい」などの振り返りの記述が見られた。しかし、書く場面において、表現する場が具体的に設定されていなかったため、目的意識や相手意識を高くもち、意欲的に活動することができたとは言えず、「目的や意図に応じ」て文章を整えられる生徒は少ない。自ら用いた「言葉」が、京都・奈良という歴史ある地で感じた思いや考えを表現する上で適切か、また情緒を文学的に表現する紀行文という形式において適切かを検討させながら学習に取り組めるように指導していく必要がある。

3 単元の目標

修学旅行の学びと古典の読解をつなげた学習において、時間の経過による言葉の変化への理解を深め、目的や意図に応じて自分の思いや考えを表現する力を高める。

4 指導計画（全14時間予定）

時間	伸ばしたい資質・能力	主な学習活動	指導上の留意点	評価の観点		
				関	書	言
第1時 ～ 第2時	・目的意識や相手意識をもって「おくのほそ道」を読み、内容を理解しようとする態度	○「立石寺」の場面を読み、「紀行文の良さ」が感じられる部分を考える。 ○紀行文に記す「俳句」について学びを深め、休暇中の出来事を俳句で表現する活動を行う。	○「紀行文」は、文学表現の一形態であることを、例を用いながら説明する。 ○授業後に生徒の作品を廊下に掲示することで、今後の創作活動への意欲を高められるようにする。		○	

第3時 ～ 第6時	<ul style="list-style-type: none"> ・表現の特色や作者の心情の伝え方を知り、自分の作品にどう生かすかを構想できる力 	<ul style="list-style-type: none"> ○映像資料を視聴し、京都・奈良の歴史や精神性を知り、紀行文の題材を考える一つの視点を学ぶ。 ○『おくのほそ道』の「冒頭」「平泉」「立石寺」の場面について、歴史的背景などに注意して作品を読み進める。 	<ul style="list-style-type: none"> ○京都・奈良は単なる観光地ではなく古人の眠る鎮魂の地であることを理解できるようにする。 ○作者や時代背景を知ること、作品の世界をより実感的に捉えられるようにする。 	○		
<p><修学旅行></p> <ul style="list-style-type: none"> ○一日の終わりに、「旅行のしおり」に、その日の出来事と感想を文章に書く。 ○一日一句、俳句を詠む。 						
第7時 ～ 第10時	<ul style="list-style-type: none"> ・文章を互いに読み合い、表現の仕方などについて評価して、自分の表現に役立てるとともにものの見方や考え方を深める力。 ・我が国の言語文化に関わり自分の思いや考えを伝え合おうとする態度 	<ul style="list-style-type: none"> ○紀行文に書く「場所」を考え、その場所で感じたこととその理由を整理して原稿用紙に書く。 ○紀行文の魅力がよりはっきりと分かるように書き換えるために、どこをどう書き換えたらいかがグループで話し合う。 ○交流活動を通して気付いたことに基づいて自分の紀行文をリライトする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○「立石寺」の場面を例に、気持ちを「じんわり」と伝えるという文学の特性について意識させる。 ○多様な視点について考えられるように、作品の周囲に余白のあるワークシートを用いて、コメントを自由に書き込めるようにする。 ○交流では、班ごとに、自分の作品をリライトする時に生かせそうな視点や観点をホワイトボードにまとめ全体で共有する機会を設ける。 	○		
第11時 ～ 第12時	<ul style="list-style-type: none"> ・時間の経過による言葉の変化について理解すること ・自分たちが使っている言葉との関係性を見いだす力 	<ul style="list-style-type: none"> ○目的や意図に合わせて紀行文を整えるという学習課題をつかむ。 ○『現古辞典』を活用して自分が書いた紀行文の言葉をより適切な表現になるように書き直す。 	<ul style="list-style-type: none"> ○擬古文の特徴や言葉のつながりについて認識できるようにする。 ○言葉がもつ曖昧性や読み手がどのように受け取るかを考えて、言葉を選ぶようにさせる。 			○
第13時 ～ 第14時 (本時)	<ul style="list-style-type: none"> ・目的や意図に応じた表現になっているかなどを確かめて、文章全体を整える力 	<ul style="list-style-type: none"> ○よりよい紀行文にするための方法を話し合い、自分の紀行文を推敲する。 ○「言葉」を捉え直した過程の場面を交流し、推敲の根拠を評価し合う。 ○単元の振り返りを行い、次の学びにどうつなげていくかを考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ○自分の表現に生かせるようにするために、推敲や交流の過程に着目して考えるように伝える。 ○目的や意図をより意識して考えるようにするために、修学旅行の事前学習で中学校二年生に向けて紹介する紀行文であることを再確認する。 	○		

6 本時の展開 (14/14)

(1) 目標

紀行文を交流する学習において、修学旅行の事前学習で中学校二年生に向けて紹介する紀行文としてよりよい文章にするために、どこをどう書き換えたらいいかを話し合う活動を通して、目的や意図に応じて、自分の思いや考えを表現する力を養う。

(2) 準備 伝え合う言葉 中学国語3 (教育出版)、ワークシート、ホワイトボード

(3) 展開

展開		◎評価項目に対する補足的な支援
学習活動と予想される生徒の反応	時間	指導上の留意点及び支援・評価
○ 前時までの学習を振り返り、本時の課題をつかむ。	3	○作品をよりよいものにしようとする意欲を高めるために、芭蕉になぞらえて擬古文で表現することを確認する。
目的や意図に合わせた表現にするための方法を考えよう。		
○ グループで推敲後の互いの紀行文を読み、書き換えた理由や新たな改善策を交流する。 <ul style="list-style-type: none"> ・古文を多く使い過ぎてしまったので、わかりにくくなってしまったな。 ・助動詞を少し変えるだけで京都の雰囲気伝えることができそうだな。 ・声に出しても意味が伝わるように言葉の選択に気を付けたいな。 	15	○話し合いの観点や話題を明確するために、古語の選択や目的や意図に合わせた表現について特に着目するように伝える。 ○グループでの話し合いのコメントを書き込めるようにするために、書き換えた理由や新たな改善策をまとめる欄を設けたワークシートを準備する。 ○推敲の結果だけではなく、どのように考えて書き換えが行われたのかを交流し合えるように、「言葉」に着目して活動するように伝える。
○ 他のグループに紹介する紀行文を班ごとに1つ選び、どのように書き換えが行われたのかを交流する。 <ul style="list-style-type: none"> ・「あはれ」という言葉を他の班では使用しているな。2年生は『枕草子』を学習した後だからわかるようだな。 ・「をかし」を「おかしい」という意味で理解する可能性があるのだな。前後の文脈も含めて自分の文章を見直そう。 ・興福寺に関する説明が少ない。行ったことがない人には分かりにくいな。 	22	○目的や意図に合わせた表現にする力を高め合えるようにするために、書き換えの過程や話し合いに深まりが見られた紀行文を選ぶようにする。 ○生徒自身が方法を見いだせるようにするために、前時に考えた二つの紀行文を振り返るよう伝える。
○ よりよい紀行文にするための方法について全体で共有する。 <ul style="list-style-type: none"> ・古語を使用する意図について、聞き合うことで問い直すことができるな。 	7	◎書き換えの過程に着目できていない生徒には、紀行文の現代文版で行った交流の活動を振り返るよう伝える。 ○全体で話し合いの内容を説明できるように、作品の概要と改善策のポイントを班で共有する時間を設ける。 ○リライトする際の参考にさせるために、このときに出されたポイントをメモするように伝える。
○ 単元の振り返りを行い、次の学びにどうつなげていくかを考える。 <ul style="list-style-type: none"> ・読み手を強く意識すると言葉の選び方や表記の選択が絞られてくるな。 	3	○書き手自身が次の学習への課題を見いだせるようにするために、単元全体から言葉を捉え直した過程を振り返るよう伝える。 ○文学的な文章を読んだり書いたりする時に活かせるよう、学習内容を振り返るよう伝える。

【書】よりよい紀行文にするための言葉の選択や目的や意図に合わせた表現について理解し、自分に生かせそうな点をワークシートに記入している。(観察・ワークシート)

<目標とする生徒の意識>

○目的や意図を意識したら自分の紀行文がよりよく変えることができたな。古語を使うことの良さや気をつける点について様々な観点から考え直すことができたな。

○擬古文を使った文章を書いたことで、古典の世界に通じる考え方を深められたり、現代の生活に生きる言葉のつながりについて認識できたりすることができたな。